

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第974号 平成27年8月3日

## トロとイヴ

「大切なものは目には見えない」といいますが、私達は、失くして初めてそれが如何に自分にとって大切なものだったか思い知らされる、という事が往々にしてあります。

失くしてみてもその大切さがわかるというのは、実はそれ程大切なものではなかったから失くすまで気付かなかったのでは、という冷めた見方もあるかとは思いますが、でも、余りにも身近にあるためにその大切さに気付かないという事は、誰にでもある事ではないでしょうか。

また、当たり前目の前に存在していたものが急に目の前から消えてなくなったような時、その消えてなくなったものが、値の張る貴重品のようなものであれば、「もったいなかった」という感じにはなりますが、その喪失感を埋める事はさほど難しい事ではありません。しかし、その失くしたものに、そのものにまつわる物語や贈ってくれた人の思いというものが付随していると、その喪失感はより深くなり、それを埋める事は容易ではありません。

それは、人と人の関わりにおいても同じ事がいえるように思います。お互いに大切だと分かり合っているのに別れなければならないという事は、生きている以上避けられませんが、でも、相手との間に確かな手応えが残されていれば、残された者にとっては生きる力となるでしょう。

一方、余りにも身近過ぎて、その存在の重要性に気付かないまま突然の別れが来た時には、失ったものの大きさに打ちのめされ、いつまでも心の中に悔いが残り、場合によっては、生きる気力さえ失くしかねません。

「トロとイヴ」は、まさしくそうした仲間との突然の別れと、その静かな悲しみを描いた作品です。子ども向けの絵本として描かれていますが、子どもだけでなく大人心にも響く1冊だと思います。

「トロとイヴ」は実話を基にした物語で、主人公はご主人様に一緒に飼われているトロ



とイヴという2匹の猫です。

ご主人様がお出かけして、二人きりになると、トロはイヴのお気に入りの場所やご飯やおもちゃを何時も独り占めにしてしまいます。

そんなある日、イヴは、ご主人様に連れられていなくなってしまう。初めの内トロは、大はしゃぎで自分だけの生活を楽しむのですが、しばらくするとトロは、何時もあんなにお気に入りだった場所もおもちゃも色あせて見えるのです。

トロは、いつも一人ぼっちになってしまったのです。

とうとうトロは、「お気に入りの場所も大好きだったおもちゃももういない。イヴが帰って来てくれるならイヴに全部あげる」と思うようになります。そして、大好きだったおもちゃを抱きしめながらおいおいと泣き出すと涙が止まらなくなり、その涙の海にトロは溺れてしまいます。

物語では、イヴが病気で死んだことを伺わせます。その事をトロは理解出来ませんが、ご主人様の泣いている姿を見て、イヴが2度と自分のもとに帰ってこない事を知るのです。そして、その悲しみは、トロから生きる力を奪い取ってしまったのです。

今、トロとイヴは遠い世界で、何時も、何処でも、一緒にいる事でしょう。

私は「トロとイヴ」を読みながら、色んな思いが錯綜してつい涙腺が緩んでしまいました。これは決して年のせいだけではありません。

(塾頭 吉田洋一)